

# 博士學位論文要約

題 目： 戦後の日本基督教団の宣教の社会的関与に関する研究

氏 名： 大倉 一郎

要 約：

## 目的と章構成

本論文は、日本基督教団の宣教における社会的関与の歴史的展開を戦後期、就中、1960年代中葉以降の四十年間余りの時期について、概観的な考察を踏まえたうえで、同時代の幾人かの宣教者に焦点を絞って、その人物の実践と思想と霊性という視座から論究する。

章の構成は以下の通りである。

序 章 戦後の日本基督教団の社会的関与

1. 研究のモチーフ
2. 研究の課題と方法
3. 研究の構成と視座

第一章 戦後の日本基督教団の宣教における社会的関与

1. 二つの概念モデル
2. 宣教とその展開
  - 2.1. 宣教という概念
  - 2.2. 宣教の社会的関与
3. キリスト教の霊性
  - 3.1. 霊性の意味
  - 3.2. 宣教の霊性

第二章 戦後の日本基督教団の宣教の模索と変革—宣教の実践・思想・霊性—

1. 戦時下及び1940年代後半～1950年代の日本基督教団の社会的関与
2. 戦後の日本基督教団の宣教の模索
3. 宣教者の探求・批判的な姿勢・霊性
4. 宣教の社会的視座
5. 宣教の社会的思想
6. 実践と省察の霊性の解明へ

第三章 岩井健作の宣教と思想、その霊性

1. 岩井健作のキリスト教宣教をめぐって
2. 岩井健作の人と歩み
  - 2.1. 農村体験と「教会と社会」を問う信仰
  - 2.2. 平和運動・赤岩栄・教会
3. 教会と反米軍基地の平和運動
  - 3.1. 反基地平和運動との連帯
  - 3.2. 宣教への新たな展望としての『教団戦責告白』
  - 3.3. 教会の体質改善とは何か
4. 個の主体性をもって教会の共同性を生きる霊性

#### 第四章 犬養光博の宣教と思想、その靈性

1. 宣教者としての犬養光博
2. 犬養光博の人と思想形成の歩み
  - 2.1. 筑豊との出会いまで
  - 2.2. 筑豊での宣教活動と思想形成
3. 「苦学」としての筑豊宣教
  - 3.1. 実践の批判的省察
  - 3.2. 実践的知
  - 3.3. 宣教—福吉の苦学
4. 宣教の思想の変革
  - 4.1. 民衆—宣教の主体
  - 4.2. 祈り—人間化としての宣教
  - 4.3. 教会—イエス・キリストの出来事の場合
5. 明識の靈性

#### 第五章 渡辺英俊の宣教と解放の神学の受容

1. 実践の解放の神学を問う
2. 渡辺英俊の人と歩み
3. 渡辺英俊と解放の神学
  - 3.1. 「第三世界」の視座から
  - 3.2. 生きた解放の神学—フィリピンという現場
4. 解放の実践と思想—移住労働者問題への取り組み
  - 4.1. 市民的实践と神学的考察
  - 4.2. 二十一世紀の宣教と神学
  - 4.3. 日本での解放の教会にむかって
5. 宣教への解放のメッセージ

#### 第六章 渡辺英俊の宣教と思想、その靈性

1. 解放の神学から歩みだす宣教
2. 宣教の社会的関与と教会形成
  - 2.1. 宣教の社会的関与の軌跡
  - 2.2. 教会形成の実験と省察
  - 2.3. 共食の共同体の形成
3. 宣教の社会的関与と共同体を結ぶ視座
  - 3.1. 聖書を読む場
  - 3.2. 現代聖書学との対話
  - 3.3. イエスの福音のもたらす解放
4. 愛への解放の靈性

#### 終章 今後の研究の課題と展望

引用・参考文献・他

#### 各章要約：

##### 序章

序章はこの研究の動機、テーマ、及び目的を述べる。戦後日本の基督教宣教は、社会的関与の領域でその取り組みを多様化し、深化してきたことは個々の宣教者の証言を上げることがで

きる。それらは歴史神学や宣教学の研究課題も生成することになる。先ずキリスト教宣教史の中にそれらをどのように記述し得るだろうかと問いを立てる。またその記述が的を射たものでありえるだろうかと問う。それらの問いに対する答えを以下のように提起する。先ず、宣教の社会的関与は、キリスト教史、就中、教会史と有機的に結びついたイエス・キリストの福音そのものの宣教の出来事における現れと見る。この視座は、言い換えれば、教会共同体は福音宣教のために世界に遣わされ、福音宣教は、世界のみならず教会自身への招きとして、教会共同体を刷新し形成すると表現することもできる。ただし、ここで言う教会と宣教との関係は、教会と福音宣教の本質的相関関係を意味している。つまり、教会がイエス・キリストの弟子であることを根源的に目ざして生きれば、その教会の宣教が、教会自身のイエス・キリストに従う営みを問い返し、根源的なものにする。このことを、教会は宣教に遣わされ、宣教は教会をイエス・キリストの共同体にすると言うのである。

そのように考え得るならば、宣教とは、教会にとって福音の招きが外に向かうだけのベクトルではなく、自らの内にも向かうベクトルであるともいえる。宣教の社会的関与と本論文が呼んでいる宣教は、とりわけ、宣教のもつ教会内外の双方向へのベクトルとしての性格を現してくると考えられると指摘する。

### 第一章

第一章は序章の問いとそれに対する応答の検証のために、序章で述べた問題意識にたちながら、それをキリスト教史としての記述に迎え入れて、具体的に記述するための方法を模索し、宣教の社会的関与、「宣教の霊性」の概念モデルを立て、その仮説的提案について詳細に説明する。

さらに本章は、戦後の日本基督教団の宣教史に新たな宣教の実践と思想を展開した一群の宣教者たちが 1960 年代後半に登場したと指摘して、それらの宣教を理解するのに宣教の社会的関与という概念モデルに照らして、その核心は人間化の宣教であると論じる。続いて、宣教の社会的関与者の理解を実態に迫って掘り下げるのに宣教の霊性という概念モデルが妥当であると提案し、それは社会活動を伴う批判的なキリスト教霊性であると指摘する。

### 第二章

第二章では、宣教の社会的関与と、宣教の霊性、という両概念を手がかりにして、アジア・太平洋戦争後の日本基督教団の宣教史を、1960 年代以降を重点的な論考の範囲として、宣教の社会的関与の概念を俯瞰する。具体的には、宣教の社会的関与者の概念で筆者がとらえている十名の宣教者について、その事績を素描する。

それらの人々の宣教の社会的関与に関して、教団を中心とした 1960 年代からの宣教の社会的関与の担い手たちを一つの群像として記述することでこの時代の宣教の特徴を示す。そのことを通じて、それらの宣教者たちに共通する基本的性格を示す。それは、日本社会の諸問題の現場に関わる宣教において、社会分断の下に限界状況や危機的事態にある人々と共に尊厳ある人間の生を取り戻すために、それらの人々と連帯しながら社会問題に取り組み、あるいは社会運動を伴って活動した営為である。それらの営為において宣教者たちはイエス・キリストの霊性を自らの生の根源的方向として受け入れている。その宣教者たちの模索の中でイエス・キリストの福音は出来事と共に現在化する。宣教の社会的関与の担い手たちは、そのような発見と証言をそれぞれの働きを通じて示していると指摘する。

### 第三章

第三章～第六章までの各章では、第二章に取りあげた十名の宣教者の中から、さらに個別の宣教者を取りあげて、それぞれの宣教運動の実践と思想と霊性を考察して、それぞれの宣教論的意味を解明する。いわば、宣教の社会的関与の歴史における事例的研究といえる。それらの考察では三人の日本基督教団の牧師であった宣教者を取りあげる。これらの人物は、戦後、おおむね

1960年代～2010年代に宣教者としての活動や発信をしてきた世代に属する人々である。

まず、第三章では岩井健作の実践と思想、その霊性を取り上げて論究している。岩井は、1960年代から主に教団岩国教会牧師として、同地で平和運動、反米軍基地運動に関与し、その経験を通じて個々のキリスト者が自らの主体性において宣教と教会形成を担う活動と主張を行った。岩井は、信仰者の主体性を一貫して重視し、『教団戦責告白』を戦後宣教の原点として、その重要性を認めつつ、さらに伝統的信仰告白への批判的検討を試み、その神学的模索の基底に歴史的聖書の読み方を用いることを重要と考えている。そこから教団教会の体質改善の道を、自らと立場を異にする人々とも粘り強い対話を通じて模索した。岩井には個の主体性をもって教会の共同性を生きる霊性を見出すことができると指摘する。

#### 第四章

第四章は犬養光博の宣教と思想、その霊性を論究する。宣教者としての犬養は、早くから北九州の炭鉱地帯筑豊で、炭鉱閉山後の困窮に直面した筑豊地域の子ども、若者、女性、老人、労働者たちとの出会いを経験し、その支援活動を担うべく筑豊での宣教の生涯を始める。さらに戦後最大の健康被害者を生んだカネミ油症事件に関わり、被害者救援運動への連帯活動を担った。これらの活動の半世紀に及ぶ経験と自省的な思索から、犬養は、福音宣教を「福吉の苦学」と理解し、宣教の思想の変革をたどって行く。さらに民衆を宣教の主体として再発見し、祈りを人間化としての宣教の営みととらえ、教会を教団組織や個別教会の次元ではなく、イエス・キリストの出来事の生起する場ととらえる思想を深めていった。その実践と思想の在り方から形成された犬養の霊性を明識の霊性として捉えることができると指摘する。

#### 第五章

第五章は渡辺英俊の宣教と解放の神学の受容をテーマに論究する。渡辺は、教団の牧師として教団全国社会委員会委員長などの職務を経験して、宣教の社会的関与の実践と思想を掘り下げたが、宣教の社会関与のあるべき姿と日本の教会の現実との間の乖離と矛盾ともいうべき緊張に行き詰まりを経験する。その経験から解放の神学に関心を抱いて、教団の宣教の社会的関与に新たな展開を模索した。

本章では、その渡辺の解放の神学との関りと受容の内容を解明する。渡辺の解放の神学理解は、宣教の現場からの接近として、実践の解放の神学を問うという姿勢が際立っている。その志向から生きた解放の神学を求める意図をもってフィリピンの宣教の現場に学んだ。帰国後、その学びを手がかりに、渡辺の宣教の実践は、当時、日本社会で顕在化してきた移住労働者問題に取り組むという活動に焦点化した。以上のような渡辺の軌跡を解明し、その宣教思想が実践的な視座からの解放の神学の受容として一貫していたことを指摘する。

#### 第六章

第六章は、前章の知見に基づいて、帰国後の渡辺英俊の宣教と思想、その霊性を論究する。渡辺は、解放の神学の視座からの宣教の社会的関与を明確にしたうえで、横浜寿町に伝道所を開設して宣教と教会形成に着手した。その後の渡辺の宣教の社会的関与と教会形成の内容を、移住労働者問題や寿町地域活動における実践と、それらに密接に関わる礼拝メッセージを主な手掛かりに論究する。

渡辺が教会形成の実験と省察から提唱したのは、共食の共同体としての教会の形成である。渡辺の言う共食とは、実際の実践として、教会の聖餐の伝統を閉鎖的宗教性に閉じ込めることなく、寿町での野宿生活者への炊き出し活動にまでつながる宣教の営みとして洞察した表現である。このような宣教の社会的関与と共同体を結ぶ視座として、渡辺は聖書を読む場と読む者の社会的立脚点を重視し、聖書理解を現代の歴史的聖書学との対話によって解放的な方向に意識化している。以上のような渡辺の宣教と思想の論究から、イエスの福音のもたらす解放の豊かさを証言する渡

辺の靈性を愛への解放の靈性と呼び得ると指摘する。

## 終章

終章は、本研究の到達点を振り返り、今後の課題を指摘する。前章までの論究によって我々は一つの歴史的反省を自覚しえると指摘する。つまり、第二章の堀光男の指摘のように、教団の1960年代の動向から教団の社会活動の歩みは、政治・社会問題に対する教団のアレルギー体質を改善したと理解できる。しかし、同時に1960年代の終わりごろから「福音派」と「社会派」という無意味なレッテル貼りと相互非難もなされるようになったとの反省点も述べた。この反省点は、今日まで悩ましい教団の状況として連続していると考えられる。

その時代を生きた宣教の社会的関与の担い手、岩井健作、犬養光博、渡辺英俊という個々人に焦点を合わせれば、これら三人の教団の牧師たちの宣教の軌跡において、1960年代からの教団での宣教の社会的関与は、グローバルなキリスト教宣教史の中に次のような意味で位置づけをもっていることが分かる。それは第二次世界大戦後の世界教会運動の宣教学の潮流に対する日本のプロテスタント宣教者たちの応答の歴史だったということである。第二次世界大戦後の宣教学的転換というべきミッショオ・デいの宣教論は、人間化の宣教論として1960年代には日本のプロテスタント宣教者たちは知っていた。またミッショオ・デいの宣教論を「第三世界」状況で深化した解放の神学の宣教論もまた、教団の宣教の社会的関与の担い手たちは受けとめて応答していたのである。

しかし、他方で、1960年代からの教団の宣教の社会的関与は、日本のプロテスタント・キリスト教史の文脈においてこそ重要な位置づけをもっている。この研究が取り上げた宣教の社会的関与の担い手たちは、それぞれの宣教の現場で、1960年代日本社会に噴出していた分断状況の抑圧を被っていた民衆と出会った。そこで、人間を踏みにじる資本と権力への憤り、侮辱され痛みを負った民衆への共感が、宣教者たちに自他の人間の尊厳と宣教者のミニストリーの再発見を、福音のメッセージに照らして迫ったということである。

## まとめ

宣教の社会的関与の担い手たちは、おおむねその宣教の当初から教会中心の改宗的伝道主義に対する疑問や批判から出発し、それぞれの宣教の実践を重ねるなかで、従来の宣教と教会への批判の側面だけでなく、それらの再形成の課題に直面して行った。一方で、批判の側面を強く示した宣教者もあった。それらを思想の限界と見るか。他方、批判しつつ再形成の課題を意識した宣教者もあった。それらには思想の可能性を認めるか。これらのことは単純に、一律に判断できない。判断の変数は幾つかあって、その宣教者が関わった社会問題や社会運動の性格や動向、教団・教会・会衆との関係性、何よりも福音理解のあり方、などがそれである。その多元的な判断の必要を前提としたうえで、それぞれの宣教者が1960年代からの時代状況の中で、分断との対峙と克服の運動において個性をもつ宣教の歴史を歩んだのだと考えられる。

しかし、同時にいずれの宣教者も、教会というキリスト教共同体と宣教の社会的関与との関係の課題をめぐってさまざまに模索した。その課題を担う主体としての個人と共同体としての教会の関係の問題ともいえる。教会の共同性とは、人間同士の分断を越える連帯を祈りと行動において放棄するならば、教会としては真実とは言えないであろう。たとえ困難な課題であっても、分断の克服はすでに教会そのものにおいて根本的課題である。

教会の宣教を「福音派」、そうでなければ「社会派」という二分法のもとに判断する発想は、あまりに表層的で狭隘だと言えよう。それは、宣教の歴史—観念ではなく—に照らして反省されなければならない。宣教における福音の多様で豊かな証言は、宣教の社会的関与の生きた経験から聴くことができる。さらに宣教の社会的関与の研究における個別研究の必要が認められる。最後にこの論究によって、戦後の教団の宣教の社会的関与の理解には、近代植民地主義の支配を経

験したアジア諸民族のキリスト教宣教史に関連した理解の形成が今後の研究課題であると指摘する。

## 主な引用文献・参考文献

### 【邦語文献】

赤岩栄「信仰的判断と科学的判断」『福音と世界』（11月号）新教出版社、1952年。

赤岩栄『赤岩栄著作集 第9巻』教文館、1970年。

赤岩栄『赤岩栄著作集 第5巻』教文館、1971年。

赤岩栄『赤岩栄著作集 第7巻』教文館、1971年。

朝日新聞「宗教語らず農業教える牧師」『朝日新聞』13版30面文化欄、2007年11月3日。

阿蘇敏文/U・デー／秋山眞兄／梶原寿／貝沼信「現場の神学とは何か」『現場の神学—生きる場からの発言—』新教出版社、1993年。

阿蘇敏文『現場からの道—世界各地の現場で、痛み、悲しみ、喜びを分かち合う』新教出版社、2005年。

雨宮栄一／森岡巖（編）『日本基督教団50年史の諸問題』新教出版社、1992年。

荒井献「初期キリスト教における霊性と批判的精神—ルカ文書を中心に—」『初期キリスト教の霊性—宣教・女性・異端』岩波書店、2009年。

荒川章三『豊かさへの渴望』（全集 日本の歴史 第十六集）小学館、2009年。

アンダーソン、ジェラルド・H.（編）『福音宣教の神学』日本基督教団出版局、1969年。

李仁夏『寄留の民の叫び』新教出版社、1979年。

李仁夏／木田献一（監修）『民衆の神学』教文館、1984年。

李仁夏『明日に生きる寄留の民』新教出版社、1987年。

李仁夏『歴史の狭間を生きる』日本キリスト教団出版局、2006年。

石牟礼道子（編）『水俣病闘争 わが死民』創土社、2005年。

移住労働者と連帯する全国ネットワーク（編）『多民族・多文化共生社会のこれから NGO からの政策提言（2009年改訂版）』移住連、2009年。

伊藤之雄『神なき時代』日本YMCA同盟出版部、1967年。

伊藤之雄「キリスト教とマルクス主義」ハンス＝リルエ『無神論 ヒューマニズム キリスト教』日本YMCA同盟出版部、1967年。

犬養光博『筑豊に生きて』日本基督教団出版局、1971年。

犬養光博『弔旗—筑豊の一隅から』日本基督教団出版局、1981年。

犬養光博「関りの中で問われた教会—そのイメージをめぐって」『福音と世界』（3月号）新教出版社、1991年。

犬養光博『析出する祈り—犬養光博発言集—（上）』告発する会、1998年。

犬養光博『析出する祈り—犬養光博発言集—（下）』告発する会、1998年。

犬養光博／他『テントの中から第五集—カネミ油症の軌跡・座り込み編』告発する会、1998年。

犬養光博「おらぶ神」『低きに立つ神』コイノニア社、2009年。

岩井健作「キリスト者と戦争責任」『中国新聞』朝刊六面、1967年5月28日。

岩井健作／他『洗礼を受けてから』日本基督教団出版局、1968年。

岩井健作「基地をゆさぶれ—岩国からの報告—」『月刊キリスト』（九月号）日本基督教協議会文書事業部、1970年。

岩井健作「我が内なる体制—子供の叫びを黙殺すまい—」『月刊キリスト』（七月号）日本基督教協議会文書事業部、1971年。

岩井健作「PEACE・ヘイワ・平和」『月刊キリスト』（三月号）日本基督教協議会文書事業部、1972年。

岩井健作「岩国に住む一個からの行動」『福音と世界』（5月号）新教出版社、1973年。

岩井健作・来間高夫『18年の軌跡—岩国キリスト者平和の会の歩み 1959～1977—』岩国キリスト者平和の会、1977年。

岩井健作「『合同のとらえ直し』の基底」『福音と世界』（3月号）新教出版社、1992年。

岩井健作『聖書を歴史的に読む』大阪キリスト教書店、1994年。

岩井健作「被災地の一隅から」『福音と世界』（4月号）新教出版社、1995年。

岩井健作「被災地の一隅から その2」『福音と世界』（10月号）新教出版社、1995年。

岩井健作「教会形成の苦闘と喜び 大倉一郎『河原の教会にて—戦争責任告白の実質化を求め続けて』」『本のひろば』（一〇月号）財団法人キリスト教文書センター、2000年。

岩井健作「宣教学とは何か」『「岩井健作」の宣教学講義録（1）』関西神学塾、2000年（未刊）。

岩井健作「教会と聖書—あとがきに代えて、思いつくままに—」『土の器に盛りたいのちの言葉—聖書をどう読むか—』日本基督教団神戸教会、2003年。

岩井健作「イエスはキリストではない 笠原芳光『イエス 逆説の生涯』」『福音と世界』（4月号）新教出版社、2003年。

岩井健作「‘市民’運動と宣教」『「岩井健作」の宣教学講義録（23）』関西神学塾、2003年（未刊）。

岩井健作『地の基震い動く時—阪神大震災と教会—』コイノニア社、2005年。

岩井健作「『求め、すすめる連絡会』とは」『福音と世界』（12月号）新教出版社、2005年。

岩井健作／渡辺英俊「草の根の『解放の神学』を訪ねる」『福音と世界』（1月号）新教出版社、2005年。

岩井健作「体感としての右傾化とキリスト教」『福音と世界』（8月号）新教出版社、2007年。

岩井健作・他「このとき、歴史に向き合う（前編）—戦争責任告白をどう生きるか—」『福音と世界』（12月号）新教出版社、2007年。

岩井健作「発題 地震で問われた教会と地域の関係—日本基督教団の場合」『キリスト教史学』（No.61）キリスト教史学会、2007年。

岩井健作「所与としてのキリスト教」『よく生き、よく死ぬために』関西神学塾、2007年。

岩井健作「“教師退任勧告決議”批判と克服をめぐる」『福音と世界』（2月号）新教出版社、2008年。

岩井健作「戦後、『問題提起』を受けっぱなし」『福音と世界』（2月号）新教出版社、2009年。

岩井健作「教会とは何だろうか」『福音と世界』（7月号）新教出版社、2010年。

岩井健作「ベトナム戦争と岩国市民」『科研研究成果報告書 基地と岩国市民』山口県立大学国際文化学部吉本秀子研究室、2011年。

岩井健作「1995年被災者から2011年被災者へ」『福音と世界』（5月号）新教出版社、2011年。

岩井健作「岩井文男と賀川豊彦の農民福音学校」『論叢』（二〇号）賀川豊彦学会、2012年。

岩井健作「危機の時代に真剣に聖書を読む 新免貢・勝村弘也『滅亡の予感と虚無をいかに生きるのか 聖書に問う』」『本のひろば』（七月号）財団法人キリスト教文書センター、2012年。

岩井健作『兵士である前に人間であれ—反基地・戦争責任・教会—』ラキネット出版、2014年。

岩井文男「回想」『敬虔なるリベラリスト 岩井文男の思想と生涯』新教出版社 1984年。

上野英信『地の底の笑い話』岩波書店、1967年。

上野英信『上野英信集4 闇を砦として』径書房、1985年。

上野英信『追われゆく抗夫たち』岩波書店、1994年。

- 打樋啓史「靈性/スピリチュアリティ」『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010年。
- 大倉一郎「解放の靈性を求めて—川崎・戸手における出会いと福音的体験」『アジアの声』（第49号）上智大学山田研究室、1987年。
- 大倉一郎『河原の教会にて—戦争責任告白の実質化をめざして』新教出版社、2000年。
- 大倉一郎「応答 歴史性・社会性を背負った隣人の靈性」『福音と世界』（5月号）新教出版社、2002年。
- 大倉一郎「グスタボ・グチエレスにおける解放の靈性—『解放の地平をめざして—民衆の靈性の旅—』を中心として—」『基督教論集』（第48号）青山学院大学同窓会基督教学会、2005年。
- 大倉一郎「渡辺英俊の宣教の実践と思想(1)—解放の神学の受容と展開—」『福音と社会』（紀要第28号）農村伝道神学校、2012年。
- 大倉一郎「福島恒雄の北海道キリスト教史研究に関する一考察—『北海道キリスト教史』への応答と評価をめぐる—」『福音と社会』（紀要第32号）農村伝道神学校、2017年。
- 大倉一郎「解放の神学と日本—ラテンアメリカから日本まで—」『ポーボ (Povo)』（会報 No.19）「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット、2017年。
- 大倉一郎「依存体質からの脱却—収奪者としてのキリスト者にとっての植民地主義からの解放—」『富坂キリスト教センター紀要』（第8号）基督教イースト・エイジャ・ミッション、2018年。
- 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晁（編）『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2001年。
- 大庭昭博『社会倫理と靈性』新教出版社、1998年。
- 「沖縄を知る事典」編集委員会（編）『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ株式会社、2000年。
- オースタハメル、ユルゲン『植民地主義とは何か』創論社、2005年。
- 紙野柳蔵『テントの中から第二集—紙野柳蔵発言集』告発する会、1993年。
- 神田健次／関田寛雄／森野善右衛門（編）『総説 実践神学Ⅱ』日本基督教団出版局、1993年。
- 菊地譲「痛む神」『低きに立つ神』コイノニア社、2009年。
- 菊地譲『この器では受け切れなくて—山谷兄弟の家伝道所物語』新教出版社、2013年。
- 木田献一「教団50年史と聖書神学」『日本基督教団50年史の諸問題』新教出版社、1999年。
- 木原滋哉「反戦・反核・反基地—広島・岩国ベ平連の場合—」『日本平和学会2011年度秋季研究集会報告』日本平和学会、2011年。
- 協友会40年誌編集委員会（編）『釜ヶ崎キリスト教協友会40年誌』釜ヶ崎キリスト教協友会、2011年。
- 葛井義憲「神学における『周辺』の意味と役割」『日本の神学の方向と課題：神学は何をなしうるか—25人の提案』新教出版社、1993年。
- グスタボ・グチエレス『解放の神学』岩波書店、1985年。
- グスタボ・グチエレス『解放の地平をめざして—民衆の靈性の旅—』新教出版社、1985年。
- 國安敬二「宣教論から見た教団」『日本基督教団50年史の諸問題』新教出版社、1999年。
- 栗林輝夫「周縁的神学知の叛乱へ」『日本の神学の方向と課題：神学は何をなしうるか—25人の提案』新教出版社、1993年。
- 寿地区センター30年の記録編集委員会（編）『いのちの灯ともしつづけて—寿地区30年の記録』日本基督教団神奈川教区寿地区センター、2015年。
- 小林紀由「わが国キリスト者の平和運動と憲法、靖国問題—『呉キリスト者平和の会』の資料調査より—」『精神科学』（43号）日本大学哲学研究室、2008年。
- ([http://jugyo10sr-kobayashi.at.webry.info/20100/article\\_10.html](http://jugyo10sr-kobayashi.at.webry.info/20100/article_10.html) 2010/06/20/9:27)
- ゴフマン、エリザベート／他（編）『女性の視点によるキリスト教神学事典』日本基督教団



出版局、1998年。  
 小柳伸顕『風と大地と太陽とーアイヌ、中南米、釜ヶ崎』日本基督教団出版局、1993年。  
 小柳伸顕「人間を尊敬する運動」『いのちの灯ともす 寿地区センター10年の講演記録集』寿地区センター講演記録集編集委員会〔編〕、2000年。  
 小柳伸顕「共なる神」『低きに立つ神』コイノニア社、2009年。  
 関田寛雄『われらの信仰』日本基督教団出版、1983年。  
 関田寛雄『「断片」の神学ー実践神学の諸問題』日本キリスト教団出版局、2005年。  
 ゼレ、ドロテー『神を考えるー現代神学入門』新教出版社、1966年。  
 成元哲「なぜ人は社会運動に関わるのかー運動参加の承認論的展開」『社会運動の社会学』有斐閣、2004年。  
 平良修『小さな島からの大きな問いーキリストとオキナワにこだわるー牧師の平和論』新教出版社、1998年。  
 平良修『私は沖縄の牧師である』沖縄恨之碑の会、2015年。  
 高橋三郎『高橋三郎著作集4 神学的著作集 上』教文館、2000年。  
 高橋武智『私たちは、アメリカ兵を越境させた……ーベ平連/ジャテック、最後の密出国作戦の回想ー』作品社、2002年。  
 高柳俊一「霊性」『新カトリック大事典』（第4巻）研究社、2009年。  
 土屋博『宗教文化論の地平ー日本社会におけるキリスト教の可能性』北海道大学出版会、2013年。  
 鶴見良行『ベ平連 鶴見良行著作集2』みすず書房、2002年。  
 デーン、ウルリッヒ「人の物語を探し求めて」『現場の神学ー生きる場からの発言ー』新教出版社、1993年。  
 ディンツェルバッハー、P.（編）『神秘主義事典』教文館、2000年。  
 戸村政博「THE YASUKUNI INSIDE OUTー「靖国」と非神話化」『総説 実践神学』日本基督教団出版局、1989年。  
 戸村政博『路上の生ー山谷から』日本基督教団出版局、1992年。  
 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（第5版）新教出版社、2004年。  
 ドール、ドナル『時代が求めるキリスト者の生き方ー霊性と正義』女子パウロ会、1989年。  
 中川六平『ほびっと 戦争をとめた喫茶店 ベ平連 1970-1975 in イワクニ』講談社、2009年。  
 なか伝道所「30周年記念誌」発行委員会『わたしたちの30年』日本キリスト教団なか伝道所、2017年。  
 日本基督教団『基督教新報』3250号、日本基督教団出版局、1961年4月8日。  
 日本基督教団神戸教会（編）『近代日本と神戸教会』創元社、1992年。  
 日本基督教団神戸教会『神戸教會々報』1995年、1996年。  
 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室（編纂）『日本基督教団史資料集』（第2巻）日本基督教団宣教研究所、1998年。  
 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室（編纂）『日本基督教団史資料集』（第3巻）日本基督教団宣教研究所、1998年。  
 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室（編纂）『日本基督教団史資料集』（第4巻）日本基督教団宣教研究所、1998年。  
 日本キリスト者平和の会（編）『キリスト者の戦争責任と平和運動』かもがわ出版、1991年。  
 野村一夫『リフレクションー社会学的な感受性へ 新訂版』文化書房博文社、2003年。  
 朴聖煥『民衆神学の形成と展開ー一九七〇年代を中心として』新教出版社、1997年。  
 花崎皋平『<共生>への触発 脱植民地化・多文化・倫理をめぐる』みすず書房、2002年。  
 原誠「タイのキリスト教1」『福音と世界』（11月号）新教出版社、2004年。

原誠『国家を越えられなかった教会—15年戦争下の日本プロテスタント教会—』日本基督教団出版局、2005年。

林貴啓『問いとしてのスピリチュアリティ—「宗教なき時代」の生死を語る』京都大学学術出版会、2011年。

林博史『米軍基地の歴史—世界ネットワークの形成と展開—』吉川弘文館、2012年。

ファベリア、V./スギルタラージャ、R.S. (編)『<第三世界>神学事典』日本キリスト教団出版局、2007年。

ホーケンダイク、ヨハネス・C.『明日の社会と明日の教会』新教出版社、1966年。

ボッシュ、ディヴィット『宣教のパラダイム転換 (下巻) —啓蒙主義から21世紀にむけて』東京ミッション研究所、2001年。

堀江正規『日本の貧困地帯 上』新日本出版社、1969年。

牧田祐子「『イエスの祈り』をふりかえる」『ことぶき「なか」だより』(No.185)日本キリスト教団なか伝道所、2018年2月。

マクグラス、A・E. (編)『現代キリスト教神学思想事典』新教出版社、2001年。

マクグラス、A・E.『キリスト教の霊性』教文館、2006年。

松田央「キリスト教の霊性 (その1) : 基礎的考察」『論集 Studies』(紀要53(2))神戸女学院大学、2006年。

道場親信「ゆるる運動主体と空前の大闘争—『六〇年安保』の重層的理解のために—」『六〇年安保改定とは何だったのか』現代史料出版、2010年。

山田経三/関望「教会用語一覧」『解放の神学』岩波書店、2000年。

弓山達也「スピリチュアリティ」星野英紀・他 編『宗教学事典』丸善、2010年。

ヨハネス二十三世『パーチェム・イン・テリス』(1963公布)カトリック中央協議会、2013年。

渡辺英俊『キリストへの道—入門十二講』日本基督教団出版局、1971年。

渡辺英俊『聖書の人間たち』日本基督教団出版局、1976年。

渡辺英俊『愛への解放』新教出版社、1980年。

渡辺英俊『現代の宣教と聖書解釈』新教出版社、1986年。

渡辺英俊『通信 中村橋から』(No.19)日本キリスト教団中村橋集会所、1987年6月。

渡辺英俊『解放の神学をたずねて フィリピンの民衆と教会』新教出版社、1988年。

渡辺英俊『通信 中村橋から』(No.9)日本キリスト教団中村橋伝道所、1988年10月。

渡辺英俊『通信 中村橋から』(No.17)日本キリスト教団中村橋伝道所、1990年2月。

渡辺英俊「外国人との共生をめざして—外国人労働者をどう受けとめるか—」横浜市立高等学校教職員組合教研部、1992年。

渡辺英俊「2・4・5・8・12章」『新版 仲間じゃないか、外国人労働者—取り組みの現場から』明石書店1993年。

渡辺英俊『片隅が天である—現代への使信』新教出版社、1995年。

渡辺英俊『ことぶき「なか」だより』(通巻No.1-No.155)日本キリスト教団なか伝道所、1996-2013年。

渡辺英俊『講演録 今を生きる—移住(外国人)労働者の人権—』日本聖公会東京教区、1999年。

渡辺英俊『旅人の時代に向かって—二十一世紀の宣教と神学』新教出版社、2001年。

渡辺英俊「日本における解放の神学の可能性—『荊冠の神学』の意義と問題」『鼓動する東アジアのキリスト教宣教と展望』新教出版社、2001年。

渡辺英俊『ことぶき「なか」だより』(No.93)日本キリスト教団なか伝道所、2002年10月。

渡辺英俊『地べたの神 現代の低みからの福音』新教出版社、2005年。

渡辺英俊「『この10年を振り返り、次の10年を考える』第6回移住労働者と連帯する全国ワー

- クショップ・東京 (2007) 報告『KALABAW』(No.125) カラバオの会広報部、2007年。
- 渡辺英俊「地べたに在す神」『低きに立つ神』コイノニア社、2009年。
- 渡辺英俊『虹を追って—ある牧師の五十年』ラキネット出版、2011年。
- 渡辺英俊「移住連政策提言の具体化に向けて—管理から権利へ」『国際移住者デー記念シンポジウム 2011 包括的移民政策の構築へ向けたロードマップ—国連特別報告者の日本への勧告を受けて報告原稿集』移住労働者と連帯する全国ネットワーク、2011年。
- 渡辺英俊『私の信仰 Q&A—キリスト教って何だ?』ラキネット出版、2012年。
- 渡辺英俊「日本の難民制度—ここが問題!」『Migrants Network』(160号) 移住労働者と連帯する全国ネットワーク、2013年。
- 渡辺英俊「人権を基調とする多民族・多文化社会に向けた移民政策を—NGOから見た現状と展望—」『KARABAW』(Volume 148) カラバオの会、2014年。
- 渡辺英俊「横浜『カラバオの会』から関東、全国の運動へ」『Migrants Network』(181号) 移住者と連帯する全国ネットワーク、2015年。
- 渡辺英俊「20年を振り返って」『20周年記念誌 寿アルク 20年の歩み』NPO法人市民の会寿アルク、2015年。
- 渡辺英俊「いっしょにメシを食う福音」『福音と世界』(6月号) 新教出版社、2016年。
- 渡辺英俊「日本における解放の神学の実践例—なか伝道所の歩みから—」『ポーボ (Pove) 』(会報 No.20) 「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット、2017年。

【欧語文献】

- Abesamis, Carlos H 1986 *EXPLORING THE CORE OF BIBLICAL FAITH, A Catechetical Primer*, Claretian Publications, Quezon City, Philippines. 1986.
- Battle, Michael. Liberation, *The Blackwell companion to Christian spirituality*. Blackwell Publishing Ltd. 2011.
- Brown, Robert McAfee. *Gustavo Gutierrez, An Introduction to Liberation Theology*. Orbis Books. Maryknoll, NY. 1990.
- Dorr, Donal. *Spirituality and Justice*. Quezon City, Philippines. 1985.
- Gutierrez, Gustavo. *A Theology of Liberation: History, politics and Salvation*. New York. 1988.
- Hennelly, Alfred T. *LIBERATION THEOLOGY : A Documentary History*. Orbis Books. Maryknoll, NY. 1990.
- Holder, Arthur. Introduction, *The Blackwell companion to Christian spirituality*. Blackwell Publishing Ltd. 2011.
- Suarez, Oscar S. *LIBERATING THE PULPIT*, New Day Publishers, Quezon City, Philippines. 1984.